長崎大学教育学部紀要－教育科学－　第57号　15～32（1999年６月）

園生活における観察資料を通しての幼児理解
――２名の幼児についての事例分析――

井　口　　均

Appreciation of Preschool Children through Observations in Nursery School
―― A Case Study of Two Preschool Children ――

Hitoshi INOKUCHI

はじめに

子どもを理解したり，保育の手立てを検討するために観察をする場合，客観的に見ることや客観的事実のみの記録が何よりも重視されることが多かった。記録者や観察者の先入観は排除され，何が客観的事実であるかは複数の記録者や観察者における一致度の高さによって決められた。しかもその場合，観察対象となる子ども（達）の行動は保育者や他の子どもからどのように見られているか，つまり既に形成されている関係性から切り離され，個別的に「できること」や「できないこと」についての行動内容，あるいはチェックリストに記載された項目を記録していくことになる。それにより得られた資料は１つの研究になり得たとしても，実践にとって意味のある資料とはならなかった。その最大の理由は子ども自身の関係性についての視点を欠落していることにある。

実際の保育実践につながる子どもの理解において重要なことは，「保育者がその子をどう見ているか，その子にどうにかかわっているかとか，他の子どもたちが，その子をどう見て，どうかかわっているかというような関係性のなかで，子どもの能力や特性は形成されている」[1] という見方である。その意味では観察者自身に対しても，観察対象となっている子どもとどのような関係をつくっているのか，どのような問題意識をもってその子を観察しようとしているかが問われなければならない。この視点は，発達的理解において「複数の人間の相互性が基盤」となって成立している「複数の人間どうしの間で織りなす意味の流れ」[2] を捉えることの重要性についての指摘とも関連している。

１．今回の事例研究における子ども理解の視点と具体的方法

(1)　基本的視点

視点として用いたのは，拙稿[3] において作成した図１に示したものである。まず対象児の表現内容と表現要求や表現構成力について検討し，また日常生活行動の自立度と遊び活動などでの対人的交わりに見られる傾向を検討した。これにより，描画表現活動に見い出される問題現象の原因を個人内の個別的な能力形成のみに求めるのではなく，重要な他者である保育者との関係，さらに園生活における仲間との関係から見直すことを試みた。

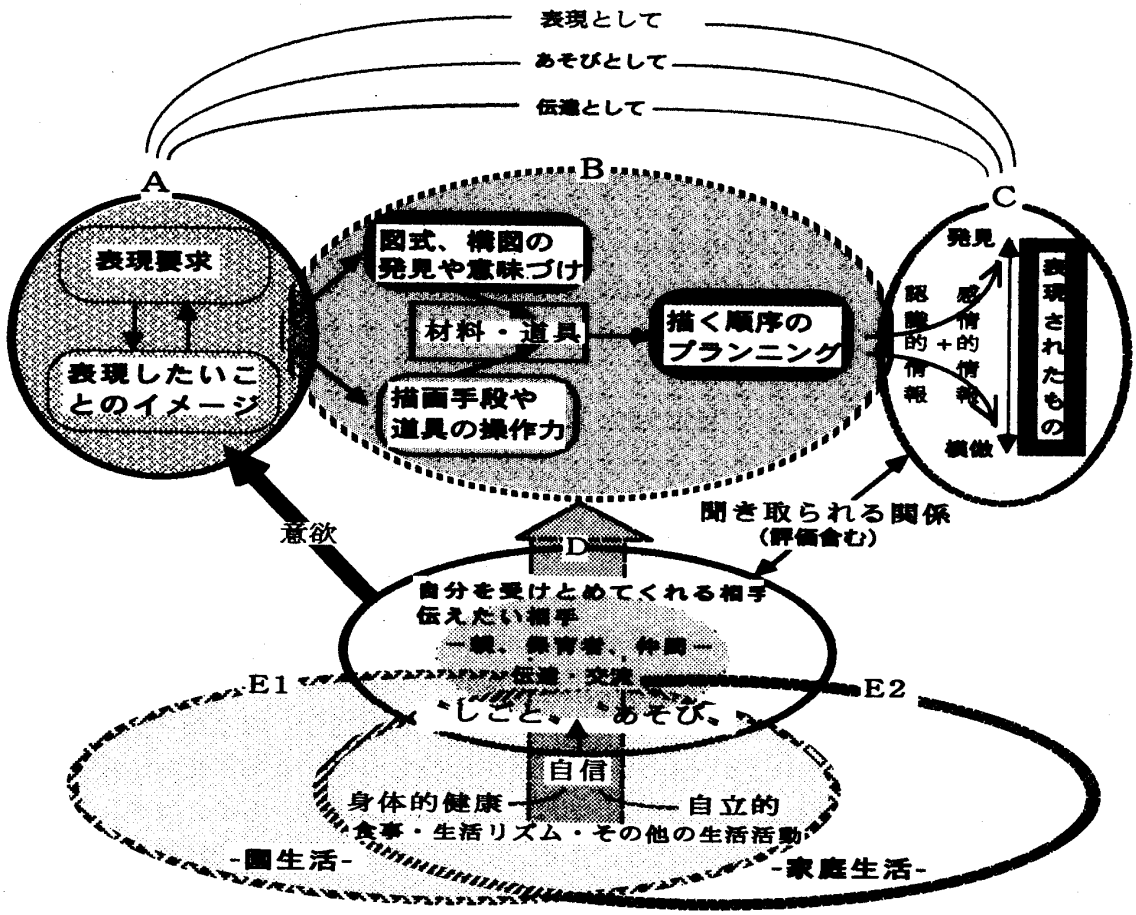


図１　造形表現活動を豊かにする自己内緒力と他者との関係性

(2) 方　法

① 観察対象児

長崎市内のA保育所に通う２名の年中児（C児：男児，Ｈ５年９月７日生，１歳５カ月入所，E児：女児，Ｈ５年10月７日生，１歳入所）を対象児とした。この２名は担任の保育者が「気になる子」として抽出した中から選ばれた。

C児の場合，４歳クラス（年中）初期の自由画において，四角や丸がすっきり描かれていないことやテレビのキャラクターしか描かれないことなどがある。生活面では落ち着きのなさ，他児に対して攻撃的対応がでやすいこと，ことばの理解や表現がうまく出来ないことが挙げられている。

E児の場合，同じく４歳クラス（年中）初期の自由画において，お話が殆どなくてこまごま描くことが多く，絵全体が寂しい印象を受けるなどがある。生活面では知的理解力がありながら他児と関わることを避ける傾向，身辺処理に手間がかかるなどが挙げられる。

このような問題点の取り出し方自体に，保育者の子どもの見方や理解の仕方が反映していると考えられるが，今回はそのことを問題として直接取り上げない。

② 資料収集の方法

i）自由描画：入所から現４歳クラス（11月まで）で描いた自由描画。

ii）保育記録：入所から現４歳クラス（Ｉ期：６月まで）の記録。

iii）生活観察：1999年７月10日９月5日にかけて15回実施。午前（９:00～10：30）と午睡（15：30～17：00）後の自由遊びと仕事場面を中心に，各対象児１名を２名の記録者が自由記述式により記録した。

2．C児にみられる諸特徴

(1) 描画表現にみられる特徴

① 各年令にける自由描画の特徴

i） １歳から4歳までの描画枚数

自由場面においてC児が描いた各年齢での描画枚数および同じクラスの子どもたちの平均描画枚数を示したものが図２である。C児の描画枚数は１歳時の９枚が最も少なく，最も多いのは２歳時の18枚となっている。３，４歳時は２歳時とほぼ同じ17枚で横ばい状態となっている。ただし，４歳時の枚数は11月までの枚数である。保育記録によれば，C児が２歳児クラスから３歳児クラスにかけて好きだった遊びは戦いごっこである。描画にはあまり関心をもたなかったようで，４歳児クラスになると描画に興味をもち描くことを楽しめるようになっており，このことが４歳での多さをもたらしていると考えられる。

C児の各年齢における描画枚数は同じクラス内での平均描画枚数と比較した場合，とりわけ少ない数ではない。平均描画枚数を下回ったのは１歳時のみで，２歳以降は同数あるいは平均以上の枚数となっている。しかし，それはあくまでもクラス全体との比較であり，相対的な意味づけでしかない。むしろクラスの平均描画枚数が少ないことを考えれば，C児の枚数がクラス平均より同等かまたは多いという事実はそれ程評価できることではない。

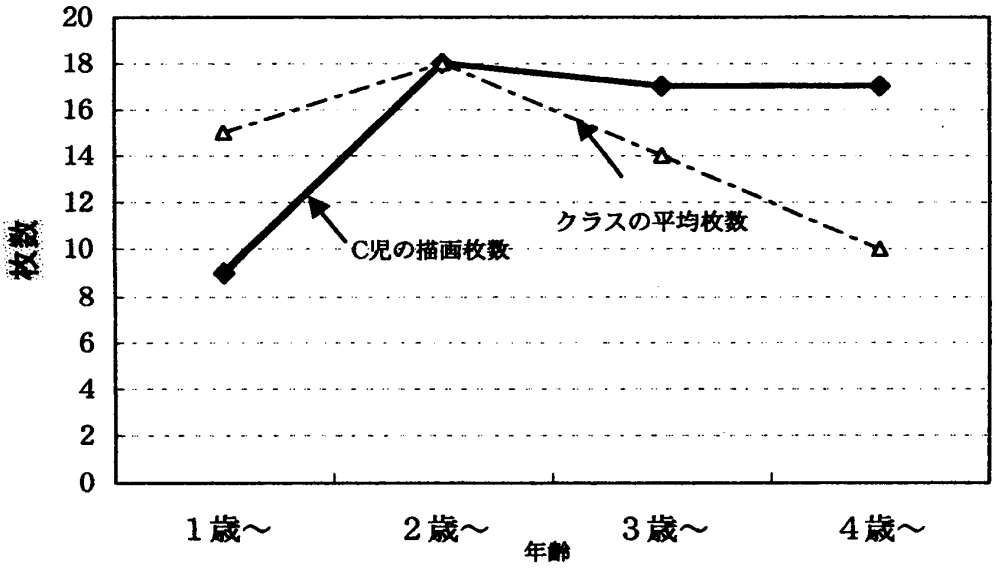


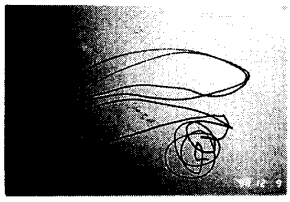
図２　C児の１歳から４歳までの自由描画枚数

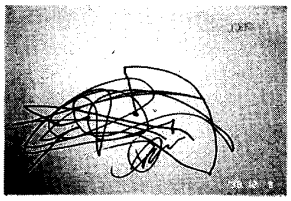
ii）2歳から4歳途中までの自由描画事例にみられる特徴

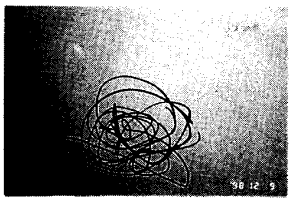
1歳9カ月の描画（写真c1，c2）に縦と横に弧状に伸びる線が描かれるが，2歳2カ月の描画（写真c3，c4）になると楕円に近い囲み図形が描かれる。この段階では当然のことだがまだ重ね描きのグルグル丸になっている。2歳5カ月の描画（写真c5）に丸や不定形が混在した状態で個別に描かれるが，スムーズな曲線が描けないのか不定形は角をもっている。線も若干弱い。この傾向は2歳7カ月の描画（写真c6）でも共通していて，スッキリとした丸は2歳の終わりまで描かれなかった。

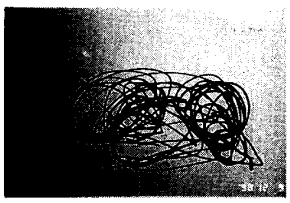
3歳の描画（写真c7）は渦巻き状態で円形の内部にもう1つの丸や点を組み込む形が描かれるようになっている。3歳6カ月の描画（写真c8）ではその傾向がさらにはっきりと示されている。この頃は描いたものに意味づけする場合が多くなり，テレビキャラクターの名前を度々挙げている。線の力は以前より強くなっているし，小さいものも描けるようになっている。また，頭足人と思われる形態も出現しているが，3歳7カ月の描画（写真c9）のようにやはり角張った所がある。この頃の意味づけは「オバケ」が多いが，単純な縦の線に「ヘビ」と意味づける場合もあった。

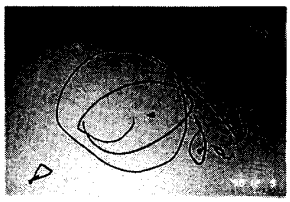
4歳の描画（写真c10）に頭足人が出現している。同じ4歳の描画（写真c11）には手をはじめ，目，口，髪，胴体部分などが一部に描かれる。その後も形態上での大きな変化はないが，4歳9カ月の描画（写真c12）にみられるような頭足人が描かれ，目と口に点と丸を各々に用いることで両者の違いを表現しようとしている。人物らしいものには従来の「オバケ」以外に「お父さん」「お母さん」「ジブン」と意味づけている。同じ4歳9カ月の描画（写真c13）に上下2つの基底線が描かれ，遠近の空間関係を表す表現様式が新たに出現している。5歳2カ月の描画（写真c14）では同じ遠近関係でも描く対象の大きさによって表そうとする表現様式も出現している。この描画では頭足人のほぼ全て手足がついているし，胴体部分が囲み図形によって表現されるといった形態面での新しい分化もみられる。恐らくクラスの皆と一緒に一列に並んでいる場面を描いたと思われる。

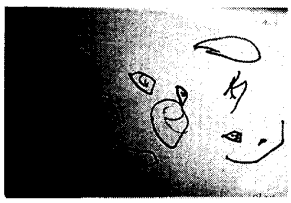

c1

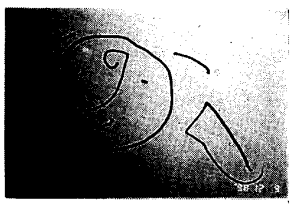

c2

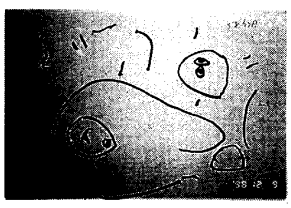

c3

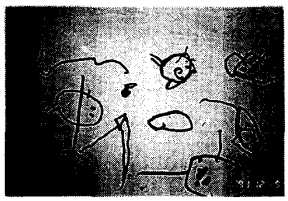

c4

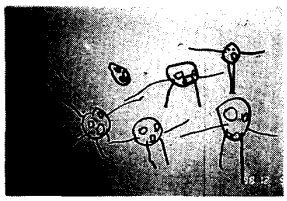

c5

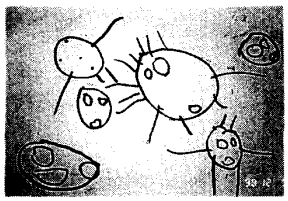

c6

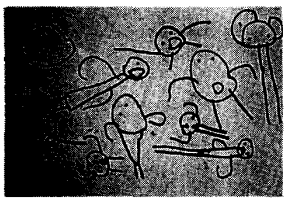

c7

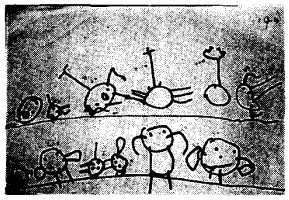

c8

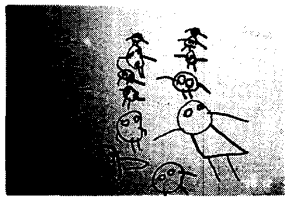

c9


c10


c11


c12


c13


c14

② 保育記録にみられる発達的特徴　2歳から4歳の記録

i）生活面の自立

2歳クラスでは就寝時間が10時から11時と遅く，結果的に寝起きの悪さや保育所での午睡に問題が生じていた。しかし，3歳クラスにあがってからは生活改善がなされ，家庭と保育所において自立起床が可能となっている。偏食も3歳クラスの頃まであったがその後偏食は見られなくなっている。

排泄と衣服の着脱等に関しては，2歳クラスの時より排泄時に自分からパンツを脱いで済ませたり，3歳クラスでは保育所でパジャマの着替えを自分でやれるようになり，その後も着実に身辺処理の力を獲得している。

大人の模倣は2歳クラスで子どもをあやす真似をしたり，赤ちゃんに見立ててぬいぐるみをおんぶして遊ぶ姿に見られている。4歳クラス前半にかけて自己主張が強くなり，遊具や順番をめぐって攻撃的な態度に出るトラブルが頻発した。しかし，後半は遠足等で自分のお茶を友達に分けたり，自分のシートに一緒に座らせてくれたり，当番活動でも仲間と協力しながら張り切って取り組む姿が見られ，自制的な力が次第に発揮されるようになっている。その一方で，4歳クラスでも着替え後の衣服の片付け，自分の持ち物の管理，帰りの準備などは保育者に注意されないとできない面もある。

ii）対人関係

保育者との関係は，2歳クラスでは話しかけるとふざけた素振りで逃げたり，目線を合わせようとしない対応が目立った。しかし，3歳クラスでは友達とのトラブルが生じた時，「○○ちゃんが△△したんだよ」と保育者に訴える対応がみられるようになっている。さらに4歳クラスではオニごっこで保育者オニに追われることを喜び，保育者オニに捕まえてもらおうとする姿がみられるようになっている。

他児との関係は，2歳クラスで自分の思い通りにならないと蹴る，叩く，噛みつくといった行動が目立っている。その傾向は3歳クラスになっても続き，他児の持っている玩具などが欲しくて噛みつくこともあった。後半になると自分勝手な要求を多少抑えられるようになったのか，力まかせの粗暴な態度が減少し，戦いごっこな

どで負けても仲間と楽しんで遊べるようになっている。4歳クラスでは，時々自分の遊びを他児に邪魔された時や自分の思い通りにならない時に喧嘩になることもあったが，積極的に仲間の中に入って一緒に何かすることを楽しめるようになっている。また，気の合う友だちを選んで一緒に遊ぼうとする選択性もみられ，3歳クラス以前の状態と比較すると他児との関わり方に相互性と親密性が増したといえる。

iii）ことば・手指操作

2歳クラスでのことばはテレビ番組のキャラクター名（ジューコービーファイターなど）やそれに関する話が多く，保育者からの話しかけ（問いかけ）に対してオウム返しが多かった。後半になって，歌の中での「あなたのお名前は」の歌詞に「ちゃんです」と応えられるようになっている。3歳クラスでも話題は相変わらずテレビマンガが主で，会話は主語か述語だけによる表現が多い。保育者からの問いかけや質問に対してもオーム返しの傾向を示していた。また，区別は出来ていないが昨日・今日・明日を用いて話そうとしたり，「えっとねー，えっとねー」と話の内容をつなげようとする面も出てきており，序列化や順序性の芽生えを指摘できる。4歳クラスでは，園で明日することやその日にあったことなどを母親にほぼ正確に伝えることができるようになっている。話し方も「えっとねー，ほんとはねー」と自分の気持を表現しようとしたり，相手から話しかけられた内容に応じた返答や会話が可能となっている。多少の遅れはあるが，相手の意図や会話内容の理解に基づく相互応答性がみられるようになっている。

2歳クラスでの手指操作は茶碗の縁しか持てなかったり，雑巾掛けの時に手指が広がらずに指先が内側に折れ曲がる傾向があった。また，手首に余分な力が入り過ぎるためかハサミを持つ時に手首から先が内側に折れ曲がり，切る動きをうまくコントロールできていない。3歳クラスでは手首や肩の余分な力が抜け，意図した形より多少の膨らみがあるものの以前よりスムーズなハサミによる切り抜きができるようになっている。しかし，小麦粘土を練ったりちぎる時の力が弱くて指先で細かくちぎることが困難なため，塊のままで遊ぶことが多い。また，手洗い時に石鹸をうまく持てずに取り落とすことが多いことも指摘されている。手指自体の力とものを持つ際に必要となる手指の動きの調整面にみられる弱さは4歳クラスでも残り，折り紙の時にジレンマを実感している様子がみられる。まず遊びの中で自発的に紙などを折って作ることがない。皆で折り紙をする時は，「どんがんすると」と何度も保育者に聞くが思うように折れず，1つできると「もうせん」とやめてしまうことが多かったと指摘されている。

iv）全身運動

2歳クラスでは身体の堅さが目立っている。前転運動でマットに手をつくことが難しく，頭を腹側に入れることできない。肩に余分な力が入り過ぎていると考えられる。走る時も左腕を振らずに曲げたまま脇腹につけ，しかもつま先立ちの姿勢で走るためにバランスが崩れて転ぶことが多い。スクーターに乗って園庭を走り回ったり，リズム運動の模倣を楽しみ，身体を動かして遊ぶことへの関心が高まっている。3歳クラスでスキップができるようになっているが，手足の動きを連動させ動作ができない。特に雲梯や登り棒は要領がつかめず，保育者が下から足を支えてい

ても動こうとしない。その後，足を掛け易い枝のある木に登れるようにはなるが，下りる時に足を踏み外すことが多い。雑巾掛けもカエル跳びで行なう。4歳クラスでは依然として要領の問題が残るが，筋力がついてきたこともあり，雑巾掛けや手押し車による遊びに積極的に取り組めるようになっている。雲梯にぶら下がって2，3本渡ることもできる。また，開脚前屈で顔を床につけられるなど，以前程の堅さがなくなり，登り棒に自力で登ろうとする意欲を見せるようにもなってる。

v）遊　び

2歳クラスで頻繁に観察された遊びは，テレビ番組のヒーローのポーズをとったり，紙を丸めて作った剣による戦いごっこである。それも断片的で同様な動作の繰り返しとなっている。他にプールや水道での単純な水遊びを1人で好んでやっていたようで，寒い時期でも構わずに長時間続くことが多かった。3歳クラスでは2歳クラスでの遊びに，1人で泥だんごを長時間かけてじっくりと作る遊びが加わっている。4歳クラスでも相変わらずヒーローごっこが続いているが，気の合う友達と2人で積み木遊びをしたり，オニごっこやケイドロといったルール遊びを好んでするようになっている。

vi）保育記録から指摘できること

生活面等にみられる特徴として，当初みられていた生活リズムの乱れがその後改善されて身辺処理の自立がほぼ確立され，それに伴って自己主張が強まっている。このC児の自己主張を保育者が受け入れる中で保育者との信頼関係が形成され，困った時に援助を求めたり，遊びにおいて保育者と意図的に関わろうとする態度が引き出されている。他児との関係ではC児の中で強まった自己主張が対立と衝突をもたらしていくが，他児からの反発を繰り返し経験することで，仲間を受け入れたり，気の合う友だちと関わりながらルール遊びに取り組めるようになっている。こうした変化が4歳後半の人物描画の出現に結びついていると考えられる。

ことば・手指操作等では，テレビの影響のためかワンパタン的な発話が多く，会話もオウム返しが多かったが，多少の遅れをもちながらも自分の話に脈絡をつけようとしたり，相手とのやり取りがある程度可能になりつつある。手指操作は手首や肩の余分な力が取れていくものの，手指の力と対象に応じた動きを調整する力が弱く，細かい作業が十分こなせない状態が残っている。これが描画表現力の遅れにもつながっている。こうした堅さは全身運動においても共通して見られ，ある動作に必要な動きやバランスの悪さにつながっている。しかし，それが少しずつ改善されて筋力がつき，出来なかった課題に対して取り組もうとする意欲を示すまでになっている。

③　4歳児クラスでの自由遊び，当番活動で見られた特徴

i）対人関係における特徴

保育者との関係は，保育記録で既に示されているように依存ができるようになっている。また，自分でできたことへの承認を求めるために保育者に積極的に声をかけ，自分に目を向けさせて認めてもらおうとしている。このようなC児の姿は保育者との信頼関係がある程度形成されていることを示している。例えば，8月11日午睡後の遊びでは保育者とC児の結びつきをよく表わしている場面が記録されている。

C児がプールの側で水鉄砲遊びをしていた時，そこに来た数人の仲間から水をかけられて大泣きをしてしまった。C児は仲間とトラブルが生じた時に，自制心を失って攻撃的な行動に出ることが時折あるが，この時も水をかけた仲間に本気で怒り，今にも殴り掛かろうとしていた。その際，保育者が「見とって」と水を入れたバケツを振り回す“芸”を見せると，その怒りを忘れて「自分もしたい」と言いながら保育者の方に駆け寄り，まとわりついている。また，同日の別の場面では，自分が側転をする時に「見とって」と保育者に声をかけている。保育者とのこのような関わり合いが15回の観察の中で５回も見られている。保育者と関わることを喜んでいるし，その呼び掛けに積極的に反応している。

他児との関係は何人かの男児と一緒に戸外での遊びを楽しめるようになっている。その際，自分の気に入った遊びでは遊具などを一人占めにして他児を排除しようとすることもある。その一方で，自分の過ちを認めて相手に謝ったり，自分より上手な他児をモデルにして自分も頑張ろうする認め方もできるようになっている。例えば，８月10日午前中のシャボン玉遊びの場面がある。ここにはC児の身勝手な面がよく示されている。石鹸水の入ったバケツを一人占めにして他児が近寄るのを拒んだ。皆から非難を受けてバケツの奪い合いになるが，結局皆に押し切られてしまい，「大嫌い」と泣叫びながら園庭の隅にある土管の中に閉じこもっている。しかし別の遊び場面では，思わず遊び相手を叩いてしまった時に「ごめんね」と素直に謝ることもできている。８月21日午睡後の遊びでは友達思いの一面を覗かせたこともある。友達であるP児がR児に泣かされた時，C児がP児に「誰がしたの。R児がしたの」と優しく尋ねて仕返しをしてやろうとする態度を見せたにも拘らず，P児が何も言わなかった為に何も出来なかった。また９月２日午前の遊びにおいては友達の優れた所を認めて皆に伝える姿が見られた。C児はリズム遊びに取り組むが足の運びがうまく行かず，ポーズも決まらない様子。すぐ側でやっていたH児が同じリズム遊びでのポーズを上手にとっているのを見て，「H君を見て，見て」と皆に呼び掛けて周囲の視線をH児に向けさせている。

ii）仕事への取り組み方にみられる特徴

当番活動や毎日の仕事には積極的に取り組んでいる。例えば７月23日の給食当番では，保育者から「ぶどうグループさん」と言われるといち早く食事準備の作業に向かい，張り切って手伝った。保育者から頼まれることを期待しているところがあり，「お皿を１つもらって来て」などと頼まれると調理室にすぐ取りに行く。教室や遊技室の雑巾掛けでも張り切って取り組むが，掃除の場合はきれいに拭くというよりも仲間と競争することを楽しんでいる所もある。保育者がC児に「上手にできたね」などの肯定的な言葉かけや表情を見せると満足げな表情を返している。このようなC児の姿を見ていると，周囲の仲間や保育者に自分のことを認めて欲しい気持ちが強いと思われる。

3．E児にみられる諸特徴

(1) 描画表現にみられる特徴

① 各年令にける自由描画の特徴

i） 1歳から4歳までの描画枚数

自由場面においてE児が描いた各年齢での描画枚数および同じクラスの子どもたちの平均描画枚数を示したのものが図3である。E児の描画枚数は4歳時の15枚が最も少なく，最も多いのは2歳時の45枚となっている。2歳時を頂点に加齢とともに枚数が減少している。それでもクラスの他の子どもたちと比較すると最も多く描いている。保育記録は2歳児クラスから3歳児クラスにかけての好きな遊びが描画であったことを記録している。2歳時の描画枚数の多さはその結果と考えられる。その後は身体を動かすリズム遊びや歌に関心が移行し，以前ほどは描かなくなったようである。3歳と11月までの4歳の枚数の減少はそのことによると思われる。

C児に場合と同様，同じクラスの子ども達の平均描画枚数自体が少ないが，E児の描画枚数の減少は遊びの好みが変化したことと関係していると思われる。

ii） 2歳から4歳途中までの自由描画事例にみられる特徴

1歳6カ月の描画（写真e1）にグルグル丸が描かれている。1歳8カ月の描画（写真e2，e3）では，その力が大小のグルグル丸に変化しているが，1歳11カ月の描画（写真e4）や2歳1カ月の描画（写真e5）では，1歳6カ月に見られたようなグルグル丸に再び戻っている。ただし，線の力が強くなり，丸もより大きなものになっている。2歳2カ月の描画（写真e6，e7）では大小のグルグル丸が再び出現している。さらに2歳6カ月の描画（写真e8，e9）では大小の不定形へと変化している。こうして独立した丸に近い形が1枚の画用紙に描かれるようになるが，スッキリした丸になっていない場合が多い。閉じ方も離れていたり，交差線がはみ

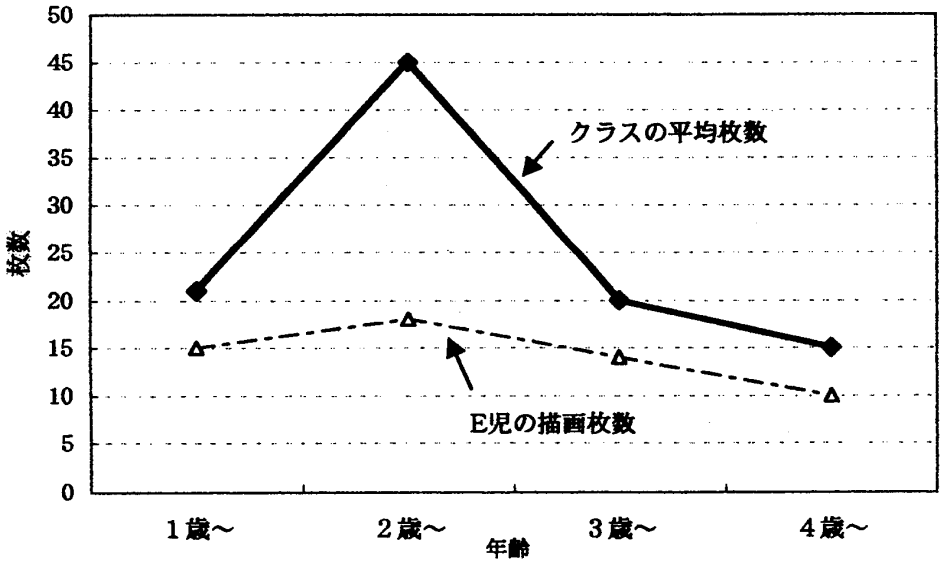
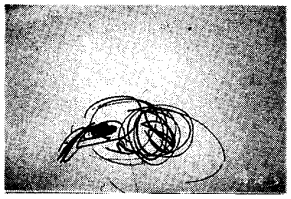


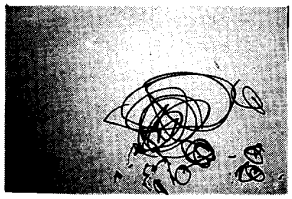
図3　E児の1歳から4歳までの自由描画枚数

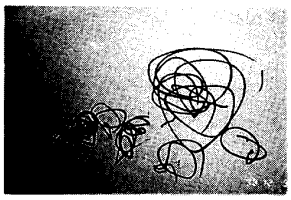
出ていたりしている。

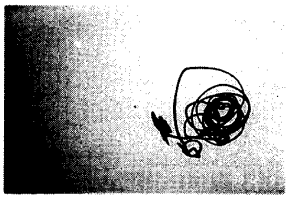
2歳7カ月の描画（写真e10）に大きい丸の中に小さい丸を描いて顔らしきものが描かれる。その後，2歳8カ月の描画にはテーマのはっきりしないもの（写真e11）が多くなるが，一部に人物が描かれたもの（写真e12）も含まれており，頭足人が出現している。3歳の描画（写真e13）には頭足人を用い，何かの場面をイメージさせるものを描いている。時折，意味づけとして家族の名前をつける場合もある。

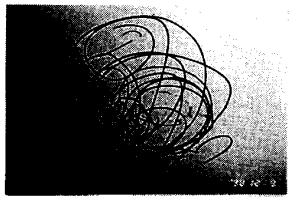
3歳2カ月の描画（写真e14）から人物が増えていき，3歳6カ月の描画（写真e15），3歳11カ月の描画（写真e16），4歳の描画（写真e17）にみられるように画面に沢山描き込みがなされるようになっている。線もスッキリしており，人物も家族をはじめ友達や保育者の名前を挙げて意味づけている。また「田んぼに行った」などの体験談が話せるようになっている。その後，4歳2カ月の描画（写真e18）や4歳4カ月の描画（写真e19）が描かれる。人物表現において，頭髪が描かれたり，胴体部分が矩形により表現されたり，衣服の装飾が一部に描きこまれるなど，形態面での分化がある程度みられるが丁寧に描かれてはいない。人物は大人を意味する場合が多く，友達の名前も何人か出てくるが後回しにされている。4歳7カ月の描画（写真e20）では胴体部分がほぼ全ての人物表現に描き込まれ，頭足人を脱する。その点で，人物表現は形態面での分化が進んでいるが，空間関係を表わす表現様式は出現していない。

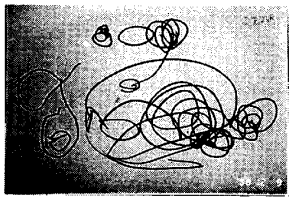

e1

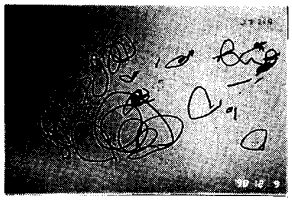

e2

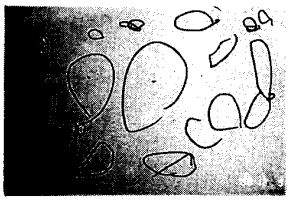

e3

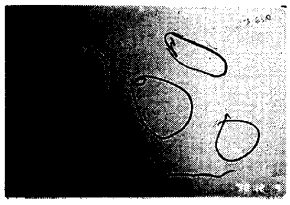

e4

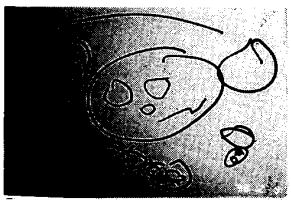

e5

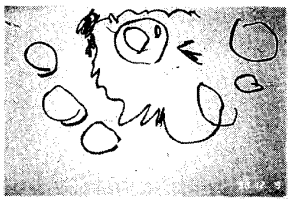

e6

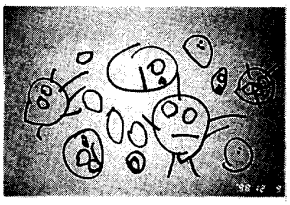

e7

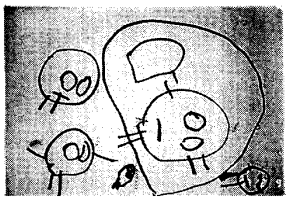

e8

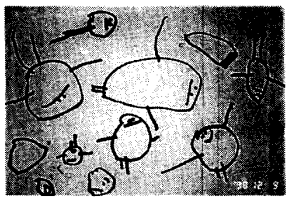

e9

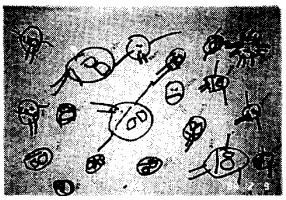

e10

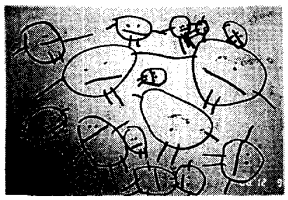

e11

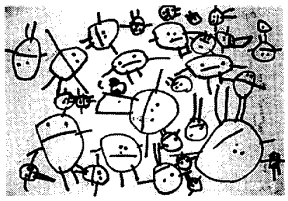

e12

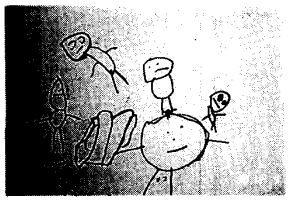

e13

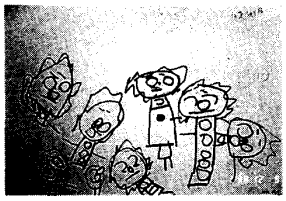

e14

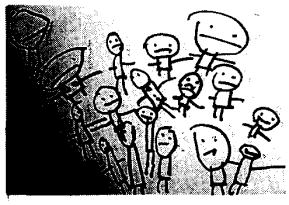

e15


e16


e17


e18


e19


e20

② 保育記録にみられる発達的特徴

i）生活面の自立

2歳クラスでは家庭での遅寝遅起きの習慣が影響し，なかなか午睡に入れない状態にあった。午睡頃になって漸く元気になり，うろつき回ったり，横にしてもモゾモゾ動いたり，独り言を言ったりして寝つくのが遅い。食事は好物なら何杯でもお代りするところがあり，直接手づかみで食べることも多い。排泄については尿意を感じたら自分でトイレまで行ってすることができるようになっている。3歳クラスでも午睡時の寝つきと寝起きの悪さは相変わらず続き，生活リズムの乱れが改善されていない。食事で目につくのはよくこぼすこと。排泄ではおしっこが間に合わず途中でもらしてしまう場合も起こっている。また自分の持ち物の管理や遊んだ後の遊具のかたづけが殆ど出来ない状態にある。4歳クラスでも午睡の改善がなされていない。食事では真面目に食べようとせず，ふざけることが目立つ。排泄での失敗は少なくなったし，靴箱に自分の靴をしまうことはきちんとできるのに，自分の持ち物については管理を放棄している。紛失しても「なくてもよかもん，また買ってもらうけん」と言って，なかなか探そうともしない。

大人の模倣は2歳クラスで人形をおんぶしたり，あやして遊ぶ姿にみられるが，4歳クラスでは保育者に対して相反する態度をとることで自己主張をしようとしている。例えば，昼食時に給食室へ行き「お手伝いすることありませんか」と自分から保育者の手助けを申し出ることがよくあるが，その一方で食事で保育者を困らせようとする対応もみられる。例えば，おしぼりを持って来ているにも関わらず忘れたふりなどをすることがある。

ii）対人関係

保育者との関係は，2歳クラスで依存傾向が強く出ている。特定の保育者への後追いや一対一での遊びを求める傾向が頻繁に観察され，「だっこ」「おんぶ」を求めることが多い。保育者を独占して甘えようとする傾向は3歳クラスでも続き，常に保育者にまとわりつこうとしている姿が観察されている。保育者と2人で遊ぶ時は気持ちも落ち着く様だが，注意は聞き入れようとしない。4歳クラスでも相変わら

ず保育者への依存傾向が強く，保育者が側についていないと集団遊びに入ろうともしない。保育者と手を繋ぐか衣類の裾を握って離れようとしない。散歩でも同様の状態を示している。また，仲間が居る場所よりも他児の居ない主任室で過ごすことを好む傾向がある。

他児との関係は，2歳クラスで同年齢の他児との関わりを避け，一人遊びをする時に他児から邪魔されるのが嫌なのか赤ちゃん部屋によく出入りしている。他児と衝突した場合はその不満を相手ではなく自分自身に向ける傾向を示している。例えば，自分のクラスで他児と衝突して喧嘩になった時，自分の頭を床に打ちつけたり，自分の手を噛むといった自傷行為を行なうことが多い。3歳クラスではちょっとしたことで他児と衝突することが多くなり相手に対して突っかかる場面が生じている。その際に自傷行為に及ぶ傾向は依然として続いている。喧嘩になった時，つねったり，叩いたり，強い口調でわざと相手と反対のことを言って口喧嘩できるようなっているが，結局は自分の腕に噛みつき泣きわめいてパニック状態になる。また，他児への接近要求をもっているが，警戒心が強いためか積極的に関われない傾向がある。自分から他児に働きかけていくことは殆どなく，散歩の時などに他児から「手をつなごう」と言われたり，遊びへの誘いがあっても拒否することが多い。その一方で「誰も手をつないでくれん」などと保育者に不満を訴えたりしている。4歳クラスでは遊び相手を選ぶようになったが遊びは持続せず，他児と関わることに一層の反発を強めている様子がうかがえる。気の合う相手との遊びで自分がイニシアティブを発揮できている時は活動が持続し表情も生き生きしているが，衝突すると自分のことを「優しくない」と開き直ったり，「分けたくない」などと自分の要求に固執し，頑な態度をとる場合もある。

iii）ことば・手指操作

2歳クラスでのことばは理解力と伝達力ともによく，二語文による日常会話が活発に出ている。保育者の頼みごとを正確に遂行できるし，家庭で体験したことを分かるように話すことができる。絵本に出てくる狼を怖がったりするが，消防車やパトカーのサイレンの音を異常に怖がるところがあり，単にお話の筋の理解力だけでは説明がつかない面もある。3歳クラスでは自分の気持を言葉にはっきり表現できるし，大人の会話で出てきた言い回しなどを真似てすぐ使える。言語面での発達は比較的早いと思われる。掃除したくない時，「動きたくない。何もしたくない」などとハッキリ言う。絵本の読み聞かせを聞く時は熱心なあまりに最前列に来て思わず棒立ちになって聞くことがしばしばある。ピアノを弾く真似をしながら自分で作詞作曲したものをリズムをとりながら歌う姿も見られている。4歳クラスでは周囲や自分に対し，意図的に否定的な発言を行なう傾向が強まっている。「仲良くせんもん」「してやらん」「好かん」「1人が好き」などわざと嫌われるようなことを発言し，保育者から「Eちゃんできるもんねー，おりこうさんやもんねー」などに対して「Eできんもん，おりこうさんじゃなかもん」と逆のことを言ってひねくれて見せることが多い。歌を歌えるのにわざと口を結んで歌おうとしないこともある。難しい言葉を知っていて作り話も上手だし，平仮名や数字も読めるし，10まで正確にものを数えることもできる。

2歳クラスでの手指操作は特に目立ったことはなく，フォークを上手に扱って食事ができるし，水道の蛇口をうまく捻って水を出したり止めたりができる。3歳クラスでは操作自体については特に気になることはないが，活動が持続しない点が問題視されている。ハサミの扱い自体には馴れ，複数の切り跡がつく場合もあるが簡単な切り落としができるようになっている。折り紙も手順にそって正しく折っていける。しかし少し長めのものを切る時，少し切っただけで「もうきり切らん」と放棄し，紙を丸めてしまうことがしばしばある。4歳クラスではハサミで曲線を上手に切れるし，ヒモ結びも上手になっているが，苦手なものはすぐ諦めようとする。また，ハサミで渦巻き切りをしたり，パジャマを持ち帰る時に風呂敷に包んで結んだりできるにもかかわらず，苦手な折り紙の時は「できんもん」「分からんもん」と言いながらぐしゃぐしゃにしたり，小さく折り畳んでしまう。ちょっとつまずくとすぐに諦めてしまいイライラしている様子がうかがえる。

iv）全身運動

2歳クラスでは足腰の弱さや体力のなさが多少指摘できるが，運動能力は必ずしも劣る方ではない。歩く時に腰がふらつき爪先立つになることが多く転びやすい。坂道や階段を登る時に「手っ手っ」とすぐ手を引っ張ってもらおうとする。しかしリズム運動は好きだし，平均台（高さ50cm）を1人で渡ったり，ジャングルジムにも登って遊ぶ。3歳クラスでは多少筋力がついたように見えるが，手足を有機的に動かすことが十分出来ずに苦手意識を募らせている。今まで出来なかった敷布団運びや木登りができるようになっているが，登り棒になると手足の筋力や動きの使いこなしが不十分なために登れない。スキップでも左足がうまく上がらずに引き摺るような動作になる。こうした自分の出来なさを感じてか，できるように頑張ってみようとするのではなく，「できんもん」とすぐ諦めてしまう。4歳クラスではやはり足腰や腹筋の弱さが克服できていないし，動作を有機的にコントロールする点についても弱さを残し，苦手意識がさらに強まっている。机2段の高さから飛び降りて手を着かずに着地できることなどから，筋力や動作力が際立って劣っている訳ではない。しかし両足を持ってもらい両手だけで歩く遊びや逆の状態で他児の両足を持ったまま歩く時など2，3歩進んだだけですぐ支えきれなくなる。雑巾掛けも足を交互に出して前進するのではなくカエル跳びになる。出来ないと「きついもん」「できんでもよかもん」と言ってゴロゴロすることが多く，苦手意識による運動嫌いが悪循環をもたらしているところがある。

v）遊　び

2歳クラスでは泥んこ遊びや水遊びを好んでしている。泥を身体中に塗って感触を楽しんだり，水道を一人占めにして水遊びに熱中している。リズム遊びや歌の時も張り切っている。3歳クラスでは感覚を楽しむ遊びに熱中することが多く，1人でままごとに取り組む姿もしばしばみられる。泥，砂，ボディペインティングなどが大変好きで汚れることを気にせず遊ぶ。色水遊びやシャボン玉遊びにも興味を示している。ままごとの具体的な内容は不明だが自分のイメージの世界に浸っている様子がうかがえる。4歳クラスでは一人遊びが中心で歌や身体表現による遊びを楽しんでいる。相変わらず1人でままごと遊びをしたり，ピアノを弾く真似をしなが

ら１人で歌ったり，身体を動かして表現する踊り遊びを楽しんでいる。

vi）保育記録から指摘できること

生活面等にみられる特徴として，生活リズムの乱れが改善されておらず，当初は出来ていた排泄で失敗するようになったり，食事の仕方や持ち物管理において加齢とともに投げやり的な対応が目立つようになっている。その意味では身辺処理の自立が逆に崩れてきていると見ることができる。その一方で，保育者に対してはお手伝いを積極的に申し出て取り組んだり，意図的に保育者を困らせるような態度をとっている。短絡的に結論づけは出来ないが，E児は生活面での自立に自信がもてず，生活課題に前向きに取り組むかたちで自己主張をすることが困難な状態にある。それだけに自分を受け入れてもらいたい気持が強まり，やろうと思えばできることでも意図的に出来ない素振りをすることで保育者の関心を引こうとしているのではないかと思われる。実際，保育者に対しては当初から甘えや依存傾向が頻繁に見られ，その後も自分をかまってもらえないと満足出来ないといった状況が続いている。同時に，同年齢の他児との関わりに対しては，自分の思い通りにしてくれる相手とは一緒に遊べるが，対等な関係では警戒心や反発心の方が優位に作用し，他児と交わることを避けようとしている。そのため相手と衝突した場合に自己主張が出来ず，むしろ自分を苛むかたちでしか自分の怒りや要求を発散できない状況に陥っていると考えられる。こうした感情的わだかまりが，描画に見られる形態表現の後退現象と関係していると思われる。

ことば・手指操作等では，ことばの理解力をはじめ表現力や伝達力は同クラスの子ども達と比較すると優れていると思われる。しかし，その力が周囲との関係づくりにではなく，相手の気分をこわし，関係を遠ざけるようなかたちでしか活用されていない。そういうやり方でしか自分への関心を引けないところがある。道具操作力でも潜在的には遂行力を十分もっていると思われる。しかし，ちょっとでも思い通りに行かないとすぐに諦めてしまい苦手意識につながる傾向がある。全身運動においても足腰や筋力弱さを多少もっているのは確かだが上手に出来ないとすぐ苦手意識につながり，結果的として意欲を失ってしまい，気持の立て直しをする機会をつかみ損ねているのではないかと思われる。

③　４歳児クラスでの自由遊び，当番活動で見られた特徴

ｉ）対人関係における特徴

保育者や大人との関係は緊密で，独占的かつ依存的傾向が強い。例えば，８月19日午睡後の遊びでプールに入るのを休み，プールサイドに座っている所へ観察者が近寄った時にその対応が見られた。その時，E児は観察者の手をすぐ掴み，何処かへ引っ張って行こうとした。移動途中に「隠れとかんば」と言うので「誰から」と聞くと「皆から」と即座に答えた。そしてプールから10m程離れた園庭の隅で２人だけて遊ぼうとした。こうした対応と同様のものが別の日を含めて４回程観察されている。また８月23日午前のような対応もある。園庭にある砂場でE児が保育者と２人だけで遊んでいる所へ，別の子どもが入って来た。本人にとっては２人だけで楽しく遊んでいたのに邪魔されたという思いが強くあったのか，直後にE児だけ抜けて主任室へ入って行った。何かある度に主任室に行くことがよくあるが，この日

も部屋に入るとE児は中にいた保育者の側に行き，おしゃべりや折り紙で保育者と遊ぼうとした。特定の保育者とは限らないが，とにかく自分だけに関わることを保育者に求めることが多く，それが一番居心地よさそうな様子。E児は大人が喋る言葉を沢山知っているため，仲間相手では話が噛み合わなくて面白くないと感じている様子もある。

他児との関係では仲間の中に入ることや皆で一緒に活動することを避ける傾向がある。そのことと関係していると思われるのが，嫌悪感や恐怖感をうまく処理出来ずに集団から逃避したり，不安状態に陥ってしまう点である。例えば，8月13日午前の場合，同じクラスの何人かの子ども達が砂場で遊んでいたので，砂場遊びが好きなE児の手をとって保育者が皆の中に入ったが，なかなか皆の遊びの中にとけ込めずにいつの間にか遊び場面から抜けてしまった。「皆と一緒に遊ばないの」と保育者が誘いかけても，E児は「1人でよかもん」と返事だけをして1人で別の場所に移動してしまった。また9月2日午前の遊びでは，大好きなリズム遊びであるにもかかわらず，皆と一緒に取り組むことを嫌って集団から抜け出している。この日は5歳クラスの子ども達と一緒にリズム遊びをすることになり，一緒に手をつないで輪を作ったり，2人1組になってリズム運動に取り組む場面があった。E児の表情は多少ふて腐れた感じで，緊張のためか動作もぎこちなく，年長の男子とも嫌々ながら手をつないでいる様子。しかし，途中でついに泣き出してしまい，集団の輪から抜け出て隣室の5歳児クラスの部屋に逃げ込んだかたちとなった。保育者は無理に呼び戻すことはせずに「どうしたの，したくなったら戻っておいでね」と声を掛けて見守っていたが，E児は戻る素振りを見せなかった。E児はピアノの横に立って窓から外を眺めるだけであった。観察者が部屋の入り口付近から遠巻きに見ている時にE児と目が合うと，E児はピアノの陰にさっと隠れてしまったのである。この場合の集団からの逃避は上手にできないのではないかという不安があったと思われる。こうした不安感を，別なかたちでより象徴的に示したのが9月2日に見せた「爆弾」への過剰的反応である。原爆をテーマにした紙芝居を3日前に見せられた時，保育者は「戦争はね，皆の喧嘩が手で叩いても足らんごとなって，もので叩くようになってそれでも足らんで，喧嘩が大きくなって，国と国が喧嘩するごとなって，爆弾ば落としたとよ。爆弾はね，お友達があっという間に真っ黒になって死んでしまう怖いものよ」と説明した。E児はその時の紙芝居を怖がって見ようとしなかった。9月2日の給食の時，E児はちょっとしたことでK児と喧嘩になり，T児と組んでK児に悪態をついたり茶化したりしていた。ところが，E児は今までの挑発的態度から一変し，「謝ろうかな，K君に」と急に言い始めた。E児はすぐに「K君，ごめんね」と謝ってから，T児にも謝るように求めたが受け入れてもらえない。するとE児はパニック状態になり，「早く謝ってよ，爆弾怖いとよ」と叫びながら泣き出してしまった。3日前に聞いた戦争についての保育者の説明を連想していることは明らかで，こうした連想によって不安にかられてしまうこともある。

ii）仕事への取り組み方にみられる特徴

当番活動や毎日の仕事への取り組み方には気分のムラがあり，必ずしも張り切る時ばかりとは言えない。例えば，7月26日夕方の給食当番では何もしようとせず，

だらだらしながら主任室で１人着替えをしていた。観察者が「どうして誰も居ない所におると」と尋ねると，E児は「隠れとっと」と答えるだけ。保育者が「Eちゃん，ご飯食べんでいいと」と問い掛けると，E児は「うん，食べんでいいと」と保育室に居る保育者に向かって同じ返事を何度も繰り返している。このように気分に任せて身勝手な行動を通そうとする時は開き直った対応を取るところに特徴がある。7月15日午睡後の掃除でもやはり気分が乗らないのか，雑巾掛けをしようとしなかった。ぐずって動こうとしないので保育者が「一緒にしようね」と促したところ泣き出してしまったので，それ以上促すことはしなかった。結局，E児は掃除中だけでなく終了した後も，１人でぶらぶら歩き回ったり積み木で遊んだりしていた。しかし気分が乗っている時は当番や掃除を人一倍頑張ってすることができる。７月21日午睡後の部屋の掃除では几帳面さを発揮していた。取り掛かりも早く，拭き掃除にすっと入り，汚れがとれない床の部分を何度も繰り返し拭いていた。拭く時の姿勢もやる気のない時と違い，つま先にしっかり力が入っていた。「もう20回した。すぐ終わるばい」と周囲の仲間に対して得意げに喋りながら雑巾掛けに取り組んでいた。

４．関係性の視点から考えられる今後の保育課題について－まとめにかえて－

(1)　C児について

描画活動から指摘できることは，基本的にC児の表現を聞き取る関係が保育者との間でつくれていないことが問題であろう。もしかしたら保育者の見方として，ことばの発達が遅れ，描画に対する意味づけやお話が出ないので積極的に聞き取ろうとする気持がもてないのかも知れない。確かに，形態表現をはじめ意味づけや空間関係の表現方法などが全般的に遅れ，描画についてのお話は皆無といえる。しかし，５歳段階でも人物表現が頭足人的表現であるにも拘わらず，３歳後半以降からは１枚の画用紙の中に複数の人物（おそらく，仲間や家族を意味）が頻繁に描かれ，何かの活動に取り組んだ体験を暗示している。しかも，空間関係の表現では遠近関係を表す２種類の表現様式が用いられ，何らかの場面を描いていると思われる。これらを保育者がどう読みとるかが重要なのではなかろうか。C児が保育者との間に意識的に聞き取られる関係がもしできれば，C児は自分の表現内容を保育者に理解してもらうために表現を工夫し，変化させる可能性がある。

その根拠として，保育記録や４歳クラスになって以降のC児の対人関係にみられる変化がある。３歳クラスでのトラブル発生時における保育者へ依存や４歳クラスでの保育者オニに追われることを喜ぶ姿，また観察でみられた保育者と関われることを非常に喜んで呼び掛けに積極的に反応する姿などを挙げることができる。この関係が描画場面でも十分生かされる必要があるのではなかろうか。

仲間関係においても，身辺処理の自立とともに３歳クラス後半頃から仲間の中に積極的に入れるようになり，気の合う友達との間ではトラブルが原因で生じる暴力的な対応も抑えられるようになっている。結果として，仲間から受け入れられ，遊びのレパートリーを広げ，表現したい内容をつくり出していることになる。その際，手指操作を活用した遊びを楽しませる働きかけが必要と思われる。観察記録でも，自分の過ちを認める

ことや，上手な他児をモデルにして頑張ろうする姿がみられている。C児が他児を受容する関係を保育者がどのように保育の中で生かすか，それがもう1つ問われていることではなかろうか。

(2) E児について

描画活動から指摘できることは，まず意味づけやお話ができるにも拘わらず，形態表現や表現内容に行きつ戻りつの現象がみられる点である。1つは1歳11カ月と1歳11カ月や2歳1カ月との間に見い出されるグルグル丸のケースがある。もう1つは2歳7カ月の描画と2歳8カ月の描画との間で人物表現の変化が再び後退するケースとして示されている。E児が描画に集中して取り組んでいる時期にこのような現象が生じているだけに疑問を感じる。何らかの心理的なわだかまりが関係していると考えられる。また，形態表現の分化に比して構図面での進展が殆どみられない点も指摘できる。画面一杯に頭足人を描き込むことができるし，その際に小さい丸を描き込む作業を根気よく取り組んでいる。その意味では指先の巧緻性もある程度まで獲得していると推測できる。つまり，対象に応じた形態表現力をもっているということである。しかし，空間場面を統合する表現様式は稚拙なカタログ状態で止まっているというアンバランスな面がある。

この現象は，おそらくE児が保育者との遊びに固執し，2人だけでの安定した関係を強く求めていることと深く関わっていると思われる。基本的には表現できる力をもちながら，それを積極的に生かしきれていないことになる。その原因として，E児の交わることへのこだわりがある。その意味で，自分を受け入れ認めてくれる他者との安定した関係（親子関係も含む）をどこで誰と築き，他者を受け入れつつ自己主張できる仲間関係をどうつくっていくのかが最も重要な課題ではなかろうか。

E児は，園での他の活動においても同様の行動傾向を示している。生活習慣でも加齢とともに崩れが生じている点に示されるように，身辺処理をはじめ日常の生活課題に投げやりになっており，対等関係における自己主張ができない状態にある。そのため，保育者を困らせる態度をとって注意を自分に向け，かまってもらおうとする対応が続いている。クラスの仲間の中で自分の勝手が通る相手とだけ遊び，対等関係にある相手は避ける。相手と衝突した場合は自分を苛み，不満を相手に発散できずにいる。ことば・手指操作などをはじめことばによる表現力や伝達力は優れているにもかかわらず，周囲と積極的な関係を築く方向ではなく，関係を気まずくする方向で発揮されている。そのため，何ごとにおいても前向きのエネルギーが働かず，諦めと苦手意識に囚われる状態になっているのではなかろうか。結果として，遊びも広がらず，運動不足が足腰や筋力を弱めている。この悪循環により，前向きに何かに取り組もうとする意欲さえ萎縮させていると思われる。そうした自分自身への不安を感じとっているのか，被暗示性も高まっていると考えられる。身辺処理での自立を含め，もう一度保育者がじっくりかかわることを通して，まず大人との信頼関係を築く必要があるように思われる。

謝辞：調査資料収集にご協力下さった青山保育園の職員さん方に感謝致します。

引用文献

(1) 森上史朗「保育実践の基盤を考える」『発達』，No.64，Vol.16，ミネルヴァ書房，1995，3頁
(2) 浜田寿美男『発達心理学再考のための序説』，ミネルヴァ書房，1993，251頁
(3) 井口　均　「幼児の描画活動に対する実践的枠組み」　長崎大学教育学部教育科学研究報告，1997，53，55頁